



TITLE:

第二十五回近畿外科集談會例會

AUTHOR(S):

CITATION:

第二十五回近畿外科集談會例會. 日本外科宝函 1928, 5(1): 146-157

ISSUE DATE:

1928-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/200102>

RIGHT:

第二十五回近畿外科集談會例會

一四六 (第壹號 一四六)

昭和二年十一月六日(日)午前九時京都帝國大學醫學部附屬醫院東講堂ニ於テ開會。來會々員頗ル多數ニシテ盛會ナリキ。伊藤、山内、鈴木、磯部、高安、小幡、澤村ノ諸博士座長席ニ就カレ午後三時半演說ヲ終了ス。次イデ五時ヨリ四條菊水ニテ懇親會ヲ開催セリ。

演題 (抄録ハ凡テ自抄)

一、乳腺内皮細胞腫ノ一例

京都町田昌直

乳腺内皮細胞腫殊ニ淋巴管内皮腫ハ稀有ナル疾患ナルモノ、如シ。演者ハ二十六歳ノ未婚婦人ノ右側乳腺ニ發生セル淋巴管内皮腫ニ就テソノ臨床的及ヒ組織的所見ヲ述ベ更ニ診斷、治療ニ及ブ。

二、各種炎症ニ於ケル末梢神經終末ノ態度ニ就テ (實驗的研究)

京都 濱田稻積
有本 廉

炎症ニ於ケル末梢神經終末ノ態度ヲ變性及再生現象ノ二トス。變性ハ炎症ノ種類ニヨリ其ノ強弱ノ程度ヲ異ニシ、最モ強度ナルハ結核菌

ニヨル肉芽性炎症ニシテ、次デ化膿性炎症ナリトス。之レニ反シ成形性炎症殊ニ異物性炎症ハ其ノ神經組織ヲ障害スル事輕ク變性程度最モ微弱ナリ。

神經ノ再生若クハ新生現象ハ概シテ炎症ノ治癒ニ赴クト同時ニ認メ得ルモノナレドモ、炎症ノ種類ニヨリ其ノ發現時期ニ遲速アリ。例之バ異物性炎症ニ於テハ一週間或ハソレヨリモ早ク新生現象ヲ現ハシ、又化膿性炎症ニアリテハ略ボ二週間後ニ於テ之レヲ認ム。結核性肉芽性炎症ニハ四週或ハソレ以上ニ於テモ之レヲ認メ得ル事能ハズ。

三、急性後腹膜腔膿瘍ニ就テ

京都 由茅二五四

(本誌本號臨床欄ニテ發表)

四、巨大ナル膀胱結石ノ一例

京都 阿部四郎

余ガ從來行ヒタル膀胱結石手術例中ニ在リテ、最近其最モ巨大ナルモノ一例ヲ得タリ。本例ハ文獻上致テ頗ル巨大ナルモノト爲スニ足ラザルベキモ、カノ「バイフエンスタイン」等ヲ除キテハ吾人ガ常ニ遭遇スル結石ヲ超越セルモノト認メ得ベク、殊ニ膀胱結石ニ就テノ報告ハ泌尿器科醫ニヨリテ爲サル、モノ多シ。是レ茲ニ報告スル所以ナリ。即チ中等度ノ梨子大ノモノニシテ重量一三〇瓦ヲ算ス。高位切開術ニヨリテ抽出セリ。本症例ニ於テ尙注目スベキハ患者ハ七十四歳ノ老婦人ニシテ結石ノ鮮シト見ラル、婦人ニ於テ見タル事、並ニ十數年ノ歲月ヲ費シテ本結石大トナレル事等ナリ。

五、自家血液注射療法ノ臨床例

京都 松本 章

古クカラ行ハレテキル Serumtherapie 或ハ Antiserumbehandlung トハ少シク趣キヲ異ニシタ左ノ四種ノ血液(患者自身ノ血液)注射療法ヲ施シタ臨床例ニ就キ代表的ノ例ノ體溫表ヲ示シソノ經過效果ノ概略ヲ述ベタ。

注射方法。

一、血液ヲゾノマ、「カルブンケル」「フルンケル」等ノ周圍健康部ニ注射スル方法 (Lawen)。

二、血液ヲソノマ、遠隔ノ場所、例ヘバ大腿臀部等ノ筋肉内ニ注射スル方法 (Vorschütz)。

三、脱纖維素血液ノ少量ヲ靜脈内ニ注射スル方法 (Stiehoff, Vorschütz)。

四、溶血現象ヲ起サセタ血液溶液ヲ局所ニ注射スル方法 (Volpantzi)。

右ノ中第一法ヲ施シタ場合ハ殆ド例外ナシニ良好ヲ得タガソノ作用ハ果シテ Lawen ノ云フ如キカ否カラ試ミルタメニ血液ノ代リニ生理的食鹽水ヲ以テシタガソノ結果ハ同様良好デアツタ例ヲ示シ第一法ノ効力作用ハ注射血液自身ノ殺菌力ヨリモ主トシテ機械的作用並ニソレニ附隨スル充血ニ在ルモノト推斷スル。第二法ハ單ニ「カルブンケル」ニ限ラズ手術後肺炎、丹毒、淋巴腺炎等ニモ適用セラレ良好ヲ得タコトモアルガ又殆ド無効ニ終ツタコトモアル例ヲ示シ、ソノ効力ハ未ダ信ズルニ足ラナイガ何等カ自然治癒ヲ促進スル様ナ刺激作用ノ存スルコトハ肯定出來ル。第三法ヲ施シタ例ハスベテ重症デアツタタメカ無効デアツタ。從ツテコノ方法ノ効力價值ハ未定デアル。第四法ハ主トシテ創傷治療ニ適用セラレ、ガソノ效果ニ見ルベキモノガナイ。

追加

宮崎 松 記

我等ノトコロデ經驗セル自家血液注射療法ノ臨床例ヲ追加ス。方法、二〇cc—四〇ccノ血液ヲ肘靜脈ヨリトリテソノマ、大腿ノ筋肉内ニ注射ス。急性化膿性炎症、手術後肺炎、肺壞疽ニ應用シテ可ナリ良好ナル成績ヲ擧ゲタリ。

六、腦血管ノ神經支配ニ關スル組織學的檢索

(第一回報告)

京都 濱田 稻 積
來 須 正 男

演者ノ一人來須ガ既ニ腦血管運動神經ノ存在ニ就テ生理學的ニ之ヲ證明シ得タル所ヨリ推セバ組織學的檢索ニ於テ亦タ當然該機能ヲ有スベキ神經纖維ヲバ形態トシテモ認メ得ル理ナリ。演者等ハ斯ル目的ノ下ニテ現在研究ヲ進メ居レルガ果シテ軟腦膜血管壁ニ於テ明カニ血管神經ノ存在セルヲ組織學的ニ證明シ得(顯微鏡標本供覽)、則チ大腦部軟腦膜ノ小動脈外膜ニ於テ無髓ノ神經纖維走行シ、或ルモノハ束狀ヲナセルヲ見ル、尙ホ該神經纖維ガ明カニ血管中膜筋層内ニ進入經過セルヲ追及シ得ルモノアリ、本標本ノ所見ガ他ノ身體部位ノ末梢血管壁ニ於テ見ル血管神經ノ所見ト甚ダ相似セル所ヨリセバコハ血管自身ノ機能ニ參與セル血管神經ナルベク亦タ生理學上證明シ得タル事實ヨリ推セバ恐ラク血管運動神經ナリト認ムルニ大ナル可能性アリト思考サル。

七、上頸交感神經節切除ノ腦脊髓液ニ及ボス影響

大阪 宇 佐 美 五 郎

演者ハ家兎上頸神經節ヲ片側ニ於テ又ハ兩側ニ於テ切除スルコニヨリ腦脊髓液ニ如何ナル影響ヲ及ボスヤノ研究ヲ企テ先ヅソノ腦脊髓蜘蛛膜下腔吸收及ビ色素「ウラニン」ノ腦脊髓内ヘノ移行濃度ヲ比較シ更ニ又腦脊髓液ノ糖量

蛋白質量細胞數(特ニ淋巴球)ヲ檢シ左ノ結論ヲ得タリ。

一、兩側上頸神經節切除家兎ニ於ケル腦脊髓蜘蛛膜下腔吸收ハ正常ナル家兎ノソレニ比シテ遲延乃至減退ス。

二、上頸神經節ヲ切除セル家兎ニ於ケル「ウラニン」ノ腦脊髓内移行濃度ハ健康ナルモノニ比シ高度ナリ。

三、家兎ノ上頸神經節切除ニヨリ腦脊髓液ノ糖量及ビ蛋白質量ハ増加シ細胞數(特ニ淋巴球)ハ増數ス。

八、興味アル腓腸筋内骨腫ノ臨床的並ニ

病理學的觀察 (缺席)

大阪 岩崎 典民

九、「ゴム」海綿ヲ以テスル新排膿法ニ就テ

大阪 宮崎 松記

急性化膿性筋炎、淋巴腺炎、盲腸周圍膿瘍ノ如キ膿瘍ガ體表面ニ近ク且ツ相當大サノ腔ヲ有スル場合ノ排膿ノ際現今用ケラレツ、アル「ゴム」管又ハ「ガゼ」ヲ代リニ「ゴム」海綿ヲ使用シ好結果ヲ得タノデアル。

先ヅ前記ノ膿瘍ヲ出來ルダケ廣ク切開シ膿及壞死性組織片ヲ除去シタル腔ヲ、ソレニ全ク適當スル大サ、形ニ切りタル「ゴム」海綿塊ヲ以テ充填ス。コノ「ゴム」海綿ハソノ儘ニ放置シ單ニ被覆乾燥「ガゼ」ノ交換ヲナスノミニシテ一週乃至二週日ノ後ニコレヲ除去スレバ膿瘍腔ハ清潔且ツ健全ナル肉芽腔トナル尙除去シタル後モ「タンポン」等挿入スル事ナク被覆「ガゼ」ヲ毎日又ハ隔日ニ交換スレバ數日ノ後ニハ腔ノ兩壁ハ互ニ相倚リ密接シテ遂ニハ細長キ肉芽面トナリ、以後正常ナル經過ヲトリテ治癒ニオモムク。

コノ方法ハ從來ノモノニ比シテ始めヨリ全ク交換スルコトナク而モ排膿完全ナルタメニ交換ニヨル患者ノ疼痛、創ノ外部ヨリノ再感染新生セル肉芽組

織ノ障害等ノ如キ缺點ナシ。

一四八 (第壹號 一四八)

一〇、小腦ニ發生セル靜脈性空洞狀血管腫ノ一例

大阪 佐々木 秀貫

中樞神經系統ニ發生スル血管腫ハ報告シタル例其數多カラズ。特ニ其病變ヲ小腦ニ發スルモノハ稀有ニ屬ス。

患者ハ三十三歳ノ男。既往症トシテ遺傳的關係ニ特記スベキ事ナシ。二十二歳ノ時松ノ木ヨリ落チテ後頭部ヲ打ツ。其後二週間後ニ後頭部ニ小ナル腫物様ノ隆起ヲ認メタリ。本年二月十日突然惡心ヲ訴ヘ爾來精神の方面ノ諸作用ノ減退ヲ來ス。四月十日頃ヨリ病勢更ニ増惡ヲ來シ運動障害、四肢ノ痙攣性麻痺、運動性失語症ヲ現ハシ來ル。同時ニ小腦性運動失調、不隨意性排尿ヲ來ス。現症トシテハ患者ハ榮養中等度、體格強健、骨骼強壯、脈搏整調、瞳孔反應ハ光線ニ對シテ純、右側眼球稍々突出シ眼結膜ハ輕度ニ充血シ、四肢ハ震顫強度ニ存シ歩行困難、一般體反射ハ亢進シ足現象モ亦著明ニ存在セリ。入院後ノ經過ハ一進一退。六月十七日ヨリ發熱シ肺炎ヲ併發シテ二十一日ニ死亡セリ。

病理解剖ノ結果腦膜ハ一般ニ肥厚瀾濁著明ニシテ腦血管ハ一般ニ怒張、充血シ右側ニ於テ殊ニ著明ナリ。小腦ニ於テモ怒張錯綜セル蛇匍狀ノ太イ血管ヨリナル包旋(convoluted)ヲ形成ス。之ヲ矢狀ニ切斷シテ剖面ヲ見レバ包旋ハ小腦實質内ニ於テ梅毒ノ實大ノ血管腫ヲ形成シ空洞十有數個ヲ有スル立派ナル空洞狀血管腫ナリキ。

一一、粘稠度ト「クロールイオン」活度

京都 赤木 四郎 藏

自家考案ノ粘度計ヲ用キ中性鹽類溶液ヲ種々ナル濃度ニ於テ精密ニ測定シ

「クロールイオン」活度ト比粘度ノ關係ニツキ次ノ如ク結論セリ。

一、比粘度ハモル濃度ト比例的關係ヲ有セズ。

一、比粘度ハ「クロールイオン」活度ト直線的關係ヲナス。

一、同一「クロールイオン」活度溶液ニ於テハ比粘度ハ陽「イオン」ノ原子番號順ト反對ノ配列ヲナス即チ此ノ事ハ「イオン」水化説ニ對シ一ツノ根據ヲ與ヘルモノナリ。

二、稀有ナルイレウス症ノ一例

京都 革島 彦 一

本年七月下旬、生來極メテ健康ナル十五歳ノ處女本年二月頃ヨリ時々腹痛アリ時ニ劇烈醫師ハ蛔虫トシテ治療シタリシガ三日前ヨリ復々劇痛而シテ下腹部ニ小兒拳大ノ腫瘍ヲ觸ル、ニ至ル主治醫ハ腸管重疊症トシテ手術的療法ノ外ナキヲ諭シ予ガ許ニ伴フ。予亦タ一診イレウス症ナル診斷ニ同意シテ開腹術ヲ加フ。腸管ニハ何等ノ變化ナク子宮腔腔腔ハ元ヨリ兩喇叭管腔ニ至ル迄殆んど今ニモ破裂セン計リニ血液ノ充滿セルヲ見ル。依テ生殖道ニ異常アルヲ察シ腹壁ヲ閉デテ外陰部ヲ檢スルニ臍口ハ粘膜樣強靱ナル結膜ニ由テ固ク閉塞セルル即チ先天性腔閉鎖症ニヨル月經血排泄困難症ナリシナリ故ニ本症ハ「稀有ナルイレウス症」ト言フヨリハ「イレウス症」ト誤診セル先天性腔閉鎖ニ由ル月經困難症ト稱スルヲ至當トスル稀レニ見ル一例ナリ。

一三、生前死因不明ナリシ外傷性糞瘻ノ一例

岐阜 小林 大 乘

病歴及經過。二十八歳男子、八月二十九日(本年)夜飲酒中下腹部ニ短刀ニ依ル刺切創ヲ受ケ爲メニ廻腸壁三個所ニ於テ哆開セル糞便ト出血ヲ伴ヘル創傷ヲ受ケタリ。患者ハ救急の手術(腸壁縫合等)ニヨリテ瀕死ノ狀態ヨリ漸次

快方ニ赴キ、受創部ニ生ゼル糞瘻モ瘻痕のニ治癒シ居リシニ、再ビ一般狀態險惡トナリ、精神興奮ニ次デ意識不明瞭トナリ受創第五十日ニ死亡セリ。

剖檢。主ナル變化ハ(1)剝離シ易キ纖維性癒着ガ殆んど腸蹄係全般ニ亘リテ存シ、別シテ上行結腸ノ内側ト小腸蹄係間ニテハ剝離稍々困難ナリ。(II)所々腸壁、腸間膜及小骨盤腔内腹膜面ニ吸收サレツ、アル血液附着ス。(III)糞瘻ノ部ハ腹壁内面ニ密着。(IV)腸壁ニ不通乃至瘻孔ナシ。(V)右側腰部腹膜外(上方ハ右腎ノ下、下方ハ腸骨前上棘ノ内側迄、内方ハ脊柱近ク迄廣ガレル)慢性ノ化膿性炎症竈アリ。是即チ死因ナリ。

考按。死因ノ生前ニ判明セザリシハ、(1)一般ニ身體ノ相當廣キ範圍ニ化膿性炎症存スレバ、一般的、局所的ニ炎症ノ徵候ヲ認ムベキニ本患者ニアリテハ自他覺的ニ異狀ヲ知ラズ。(2)本患者ノ如ク重症且ツ營養衰ヘタル者ニアリテハ化膿性炎症ニ對スル抵抗力弱ク、爲メニ其證考タル體溫等ノ著變ナカリシガ。(3)始メヨリ炎症頗ル徐々ニ起リタル爲カ。以上ノ理由ニ依リ余輩ハ生前ニ其炎症ヲ診斷シ得ズ。從ツテ又其死因ヲ明ラカニナシ得ナカツタ。

一四、盲腸炎手術後ニ起レル輸尿管結石 附、結石ノ位置及ビ大サ測定

京都 齋藤 大 雅

患者。二十八歳、男、吳服商。

現症。大正十三年盲腸炎ノ手術ヲ受ケ、小指大ノ虫様突起ヲ切除シ癒着シナカツタト申シマス。爾來盲腸部ニ疼痛ヲ訴フ。惡寒、熱感、惡心ヲ伴フ。注射シテモ中々鎮痛セヌ程度デアリマス。

既往症。大正十二年腎臟炎。

家族歴。父ハ腦出血、同胞中一人腦膜炎。
所見。造影食ヲ與ヘテ、胃腸検査ヲ致シマシテモ盲腸ノ直下左方ニ輕度ノ壓痛アルノミデス。

尿ニ鏡檢デ極少數ノ白血球アルノミ他ニ著變ナシ。

膀胱鏡所見。右腎臟ヨリノ尿量左ニ比シテ少イト云フノミ。

「レントゲン」寫眞ヲ撮リマス。御供覽申上ゲマス。通り、左側輸尿管結石、一寸珍ラシイ症例デアリマスカラ、御目ニカケマス。

次ニ結石ノ位置及ビ大サ測定デアリマスガ、今更私ガ申上ゲル迄モナク皆様御承知ノコトデアリマスガ、有合セノ品物デヤツテ見マシタカラ皆様ノ御追試ヲ御願ツテ御批評ヲ仰ガント、思ツテ申上ゲル次第デアリマス。

位置測定ハ以前カラアル方法デ、球管移動ニヨリ測リ、大サハ二本ノ針金ヲ臍部ト背部ニ貼付シテ、擴大比ニヨリ測定シテミマシタ。

一五、先天性筋性斜頸ノ成因ニ關スル研究(缺席)

大阪 鈴木 清 治

一六、脾臟ト白血球増加トノ關係ニ就テ

大阪 大橋 兵 次 郎

實驗ノ白血球增多ノ場合ニ於ケル白血球ノ増減ヲ時間的ニ觀察スレバ直後ニ白血球ノ減少即チ陰性現象ヲ經過シテ然ル後ニ白血球増加ヲ喚起スルモノナリ。

演者ハ最近新鮮ナル自家或ハ同種白血球融解液注射ノ場合ニ於テハ全ク陰性現象ヲ認メ難クシテ注射直後ヨリ著明ノ白血球増加ヲ來タスコトヲ實驗セリ。

融ツテ生體內ニ於ケル白血球ノ運命ヲ考フルニ生理的狀態ニ於テモ白血球ハ時々刻々破壊或ハ自家融解スルコトニヨリ絶エズ消失スルモノニシテ而カモ是等ノ破壊或ハ融解セル所謂白血球融解物質ハ骨髓質ノ他ノ造血臟器ニ對シテ白血球増加ヲ來タス絶好ノ刺激ナリ。而カモ脾臟ノ作用ハ此ノ自然ニ生ズル白血球融解物質ヲ抑留シテ造血臟器ニ對スル刺激ヲ緩和スルモノニシテ

一五〇 (第壹號 一五〇)

演者ハ此ノ間ノ消息ヲ血清出注射特ニ健常血清脾摘動物ノ血清並ニ陰性現象ヲ呈セル時機ニ於ケル血清ヲ健常動物並ニ脾臟摘出動物ニ注射シテ前述ノ考ノ適切ナルコトヲ實證セリ。

一七、胃下垂症ニ就テ

倉敷 伊 藤 挺

胃下垂症ノ原因ニ關シテハ、從來種々論議サル、處ナルモソノ殆ド總テハ原因ノ何レニ拘ハラズ、胃ノ下垂ナル現象ガ胃ヲ提舉スル物質又ハコレフ下方ヨリ支持スル物ノ變化トシテ説明スル處ハ凡テ一ツナリトス。

然ルニ余ハ以前ヨリ胃ヲ下方ヨリ支持スル物ノ變化ニ類スベキ胃ヲ下方ニ牽引スルコトニヨリ本症ヲ招來セザルベカラザルヤヲ考フルコト久シカリシガ、其後果シテコレニ相當スル三臨床例ヲ得タルヲ以テ此處ニ報告スル次第ナリ。

第一例ハ五十七歳女無職。第二例ハ四十二歳女農業。第三例ハ四十五歳女農業ニシテ凡テ經産婦ナリ。第一例ハ五年前子宮病、第二例ハ二年前重症ナル盲腸周圍炎、第三例ハ三ヶ月前同様盲腸周圍炎ヲ經過セルモノナルガ、其後胃下垂症狀ヲ以テ發病シ來リレントゲン検査ニヨリ何レモ胃ノ下垂ヲ證明サレシモノナリ。

手術所見トシテ胃ハ多少ノ度ニ於テ萎縮狀ヲ呈シレントゲン所見ノ如ク明カニ下垂狀ヲナス。モ器質的變化ヲ何處ニモ認メズ。著明ナル變化ハ大網膜ニアリタリ。即チ第一例ニ於テハ大網膜先端ハ小骨盤內臟器及小骨盤壁ト、第二例及第三例ハ廻盲部及ビコレニ續ク前腹壁體壁腹膜ト廣ク且ツ強固ニ癒着ヲナシ爲ニ大網膜ハ相當ニ緊張シ從ツテ胃ハ結腸ト共ニ下方ニ牽引セラル、ノ狀ヲ呈シコレガ爲胃ハ著シク下垂シタルヲ見タリ。因リテ第一例ハ癒着甚シカリシ爲胃腸吻合ヲ施セルニ諸病狀全快セザリシカバ第一回手術後五十日目癒着剝離ヲ行ヒ第二例及第三例ハ單ニ癒着剝離ノミヲ行フ。

術後漸次症狀ハ輕快シ月餘ニシテ全ク消失シ胃ハ再ビ正常位ニ復歸スルヲ見タリ。

要之上記三症例ハ大網膜ノ骨盤及下腹部ニ於ケル廣汎ナル強キ癒着ニ基ク胃下垂症ガ之ヲ剝離スルコトニヨリ全治セシ症例ナリ。勿論此ノ際ニハ體質其他從來唱ヘラレシ種々ノ原因ノ與ルベキモ、カ、ル大網膜癒着ナルコトハ胃下垂症發生要約ノ一ツニ加フベキモノト思考ス。

一八、稀有ナル胃壁腫瘍

大阪 藤 森 舜 吉

四十四歳ノ男子。胃前壁、幽門竇ノ部分ニテ筋層ト粘膜下層トノ間ヨリ發生セル鶏卵大ノ「メラノサルコーム」ヲ剔出シ、之レガ臨床的觀察ニ就テ報告セリ。

一九、胃全剔出ノ術式及術後ノ臨床的觀察

(抄録未着)

大阪 島 薫

二〇、胃全剔出ニ就テ

京都 塚 原 仲 光

(本誌前號原著欄ニテ發表)

二一、腰薦交感神經切除術ノ適應症ニ就テ

京都 大 澤 達

一九二五年腰薦交感神經切除術ガ始メテ臨床上ニ應用セラレ其適應症ノ範

圍ハ下肢ニ於ケル交感神經的刺戟ニ因スル疾患及ビ治癒遲延セル諸種慢性疾患デアツテ是等ノ疾患中今日迄實驗セラレタルモノニ於テハ皆卓越セル效果アルコトガ一般ニ承認セラル、ニ至ツタノデアル、今ヤ此手術ハ第一適應症ニ對スル「Therapia causalis」トシテヨリモ第二適應症ニ對スル「Therapia morbi」トシテ應用範圍ヲ擴大シテ居ルノデアリマス、私ハ最近象皮病及ビ「エリトロメラルギー」ニ對スル二治療例ヲ經驗シ何レモ中年以上ノ觀察ニ於テ效果ヲ持續シテ居リ最早ヤ全治ト認メルコトガ出來ルト思ヒマスノデ今日是レヲ本會ニ報告シテ本手術ノ適應症ニ附ケ加ヘタイト思ヒマス。

象皮病ニ對シテ此手術ノ行ハレタノハ私ノ例ヲ以テ嚆矢トスルノデアリマス、血流ヲ盛ニシ從テ淋巴ノ還流ヲ旺盛ニシテ本病ニ來ル淋巴ノ滯溜ヲ防止シヨウトノ目的デ此手術ヲ行ツタノデアリマス、四六歳ノ婦人患者デ本年二月熱發ヲ以テ發病、左下肢全體ハ漸次緊張腫脹シテ五月來院當時ハ健側ニ比シテ一見二倍大、左右周徑ノ差ハ八糎ニ及ビ絕對ニ坐ルコト及步行ガ出來ナイ狀態デアツタガ手術後急速ニ腫脹ハ減退シ一週間後ニ步行シ且ツ坐スルコトヲ得ルニ至リ一ヶ月後ニハ左右ノ差ハ一見不明トナリ周徑ノ差ハ一乃至三糎トナリテ苦痛全ク消失シテ退院シ今日欣然トシテ勞働ニ從事シテ居ルノデアリマス。

「エリトロメラルギー」ニ對シテハ此手術ノ施サレタト云フ報告ハ本邦ニ於テハ齋藤氏、米國ニ於テハローヤル・ダビス氏ノ例ガアリマス、何レモ全治シタトノコトデアリマス、私ノ例ハ一九歳ノ朝鮮青年デアリマシタ、本年正月發病、兩側ノ足先、趾ニ熱感ト激痛トガアリ毎日足ヲ冷水ニ浸シテ居ナケレバ疼痛ニ堪エルコトガ出來ナイ、足ヲ下ゲルト直グニ痛ミガ激シクナリ歩行ガ出來ナイト云フノデアアルガ診ルト僅カニ赤イ位デ定型のノ赤味ヲ呈シテハ居ラナイ、藥効學的検査ノ結果デハ「ワゴトニークル」デアツテ明カニ植物性神經系統ノ異常緊張ヲ示シテ居ル、三月ニ入院シテカラ一ヶ月間會テ澤村氏ノ行ハレタ自家血液注射療法ヲ連續行ツテ見テモ不幸ニシテ無効デアル、

二三、簡易確實ナル火傷及疔ノ新治療法 (缺席)

三 重 岩 野 森 之 助

二四、平壓開胸術後ノ患者供覽

京 都 田 淵 尹 巽 馨

追加、兩側平壓開胸例

大 澤 達

更ニSchirmer氏ノ「アドレナリン」注射療法ヲヤツテ見タガ是亦無効デアル、ソコデ此手術ヲ施シタ所ガ翌日カラ全ク痛ミガ止マツテシマツタ、朝鮮ニ歸ツテカラ一度輕イ痛ミガ起ツテ來タノデ再發シタカト思ツテ居リマシタガ暫時ニシテソレハ止ミ今ハナントモナイトノコトデアリマス。

象皮病ノ治療ニ向ツテ從來色々ノ努力ガ拂ハレタケレドモ今以テ満足スベキ方法ガナイ、今日迄行ハレテ居ル何レノ外科の處置ヲ見テモ皆罹患部ト健康組織トノ間ニ諸溜淋巴ノ誘導裝置ヲ造ルモノデアルケレドモ此部ハ一定時期後ニハ纖維様結締組織ニ變化シ遂ニ瘢痕組織ヲ形成シ永續のニ淋巴ヲ誘導スル目的ニハ適シナイ、多クノ臨床實驗ガ此事ヲ證明シテ居ルノデアリマス、私ノ方法ニ於テハ淋巴ハ配下ノ血行ニヨツテ運バレルカラ斯カル憂ヒハナイ又効果ハ永續スルモノト信ズルノデアリマス、疾患ガ高度デ既ニ發病古クPachydermieノ強イモノデハ浮腫ハ私ノ方法デ直チニ退治スルコトガ出來テモ肥厚セル皮膚ハ一定程度以上ニハ軟化シナイ、從テ病勢ノ進行ハ止マツテモ肢ノ周徑ハ或ル程度以上ニハ細クナラナイ、斯カル際ニハ紡錘狀切除法ニヨル成形の手術ヲ行ヒ形ヲ直スコトヲ第二段トシテ考ヘル場合モアロウ。

次ニ腰薦交感神經ヲ切除シテ何故ニ「エリトロメラルギー」ガ治癒スルカ、洵ニ興味アル問題ト思フノデアアル、本症ノ原因ハ寧ろ迷走神經興奮ニアリトセラレ實際此患者ノ如キモ「ワゴトニーケル」デアリ乍ラ此手術デ治癒シタト云フコトハ甚ダ理解ニ苦シム所デアアルガ、コハ恰モ氣管枝喘息ガ頸部交感神經切除ニヨツテ治癒スルト同ジ様ニ交感神經ヲ切除スルト交感神經中ノ求心性興奮傳達道ガ破壊セラレテ迷走神經中樞ノ興奮狀態ニ變化ス來スガ爲メト理解ス可キモノデアロウ。

二三、蟲様突起ノ生理的機能ニ關スル研究 (缺席)

大 阪 大 野 良 藏

一側平壓開胸術ガ最早ヤ何等ノ不安ナシニ行ハレルト云フコトハ工藤君ヤ教室カラ由茅君ノ實驗的根據ト從來島瀉先生ノ示サレタ多數ノ臨床實驗例トデ明ナコトデアリマスガ私が最近ニ島瀉先生ノ渡歐ナサル少シ前ノ頃先生ノ下デ經驗シタ食道癌ノ一例ハ今後兩側平壓開胸ト云フ問題ニ對シテ興味アルモノト思ヒマスカラ追加致シ度イト思ヒマス、農業ヲ營ム中年男子デアリマシタ、X線所見デ見ルト食道最下部デ延長二二三厘米ノ腫瘍デアアル、コレコンハ今迄經驗シタ食道癌ノ開胸例ト異ヒ必ズ切除出來ルダロウト云フ見込デ唯今ノ演者ト同ジ様ニ型ノ如ク左側胸腔ニ入り先ヅ橫隔膜神經ヲ挫滅シテ橫隔膜ノ運動ヲ止メ該膜ヲ食道ヨリ左ニ切開シテ噴門部ヲ遊離シタルニ腫瘍ハ噴門部ニ及バナナイ、食道下端ノ腫瘍ヲ漸次周圍ヨリ剝離スルニ癒着ハ右側肋膜ニ及ンデ居タ爲メニ剝離ニ際シ之レヲ傷ツケタモノデスカラ此ノ窓カラ急激ニ空氣ハ吸入サレテ一時呼吸ハ中止致シマシタ、扁側平壓開胸術ノ際デモ斯様ナコトガアリマス故私ハ靜カニ食鹽水「ガーゼ」デ此穴ヲ覆ヒマストヤガテ呼吸ハ歸リマシタ、「ガーゼ」ヲ放スト又呼吸ハ險惡トナリマス、食道ノ剝離ヲ終ツテ食道ヲ牽キ上ゲテ見マスニ腫瘍ハ固ク延長七厘米ニ亘ル浸潤デアリマスカラ吻合モ切除モ出來マセン、止ムヲ得ズ剝離シタ食道ヲ元ノ位置ニ戻シ

周圍組織ト固定スルト一般狀態ハ全ク安靜トナツタノデアリマハ、橫隔膜ヲ縫合シ胸腔ヲ型ノ如ク閉鎖シ空氣ヲ吸引シテ術ヲ終ツタノデアリマスガ此手術デ私共ノ經驗シタコトハ兩側開胸ヲ平壓ノ下ニ呼吸裝置ト云フ様ナモノモナク續ケルコトハ無論危險ヲ生ズルノデアルガ然シ短時間ナラバ時々一側ヲ人爲的ニ閉鎖スレバ堪エ得ラレルモノダト云フコトデアル、人工呼吸裝置ハ斯クノ如ク兩側開胸ヲ餘儀ナクセシムル手術ノ際ニ人間ニモ多分安全ニ長時間ノ手術ニ用ヒラレルモノダロウト云フ暗示ヲ得タ様ナ氣ガ致シマシタ、此例ハ計ラズモ兩側ガ平壓ノ下ニ開胸サレタコトニナリマシタ、而シテ胸腔マデモ連通シテ開カレ外氣ニ曝サレタコトニナリマシタ、斯カル例ハ未ダ報告サレテ居ラナイヤウニ思ヒマス。

二五、特發性食道擴張症ノ内科的療法ニ就テ

京都 水田 信夫

最近木村潔氏が病理解剖ノ處見ヨリ、又岩井孝義氏並ニ余ガ臨床的及動物實驗的處見ヨリ特發性食道擴張症ハ迷走神經核ノ器質的變化ニ依ルトナセルニ基ケバ、本疾患ノ完全治癒ハ望ムコト能ハズシテ唯噴門緊縮ヲ緩解スル方法ヲ以ツテ満足セザルベカラズ。之ニ對シ余ハ臨急的ニ「アドレナリン」又ハ之ト「アトロピン」或ハ「ババベリン」ヲ皮下ニ與ヘ、持長的ニ「アトロピン」ヲ經口のニ使用スルコトノ有効ナルヲ吾松尾内科ニ於ケル經驗ニ基キ茲ニ推奨セントス。

二六、特發性食道擴張症ノ手術例

京都 辻村 秀夫

二十五歳ノ男子ニシテ特發性食道擴張症ト診斷セラレタル患者ニ左側平壓開胸術ニヨリ噴門成形術ヲ行ヘル手術例ヲ報告ス、(詳細ハ本誌ニテ發表ノ豫定)

追加、平壓開胸十五例ニ就テ

横田 浩吉

先刻巽、田淵兩君ヨリ供覽セラレタル二例及ビ唯今辻村君ヨリ報告セラレタル一例ハ余等ガ當教室ニ於テ平壓ノ下ニ開胸シタル患者十五例ノ内ノ三例ナリ。

其十五例トハ噴門癌五、食道癌四、肺結核二、中隔竇腫瘍一、胸腔寒性膿瘍一、肉腫肺轉移一、噴門「スバスマス」一、食道擴張症一ニシテ其内右側ヲ開キシモノ三、左側ヲ開キシモノ十二、男十一、女四ナリ。

開胸時間二十五分乃至四十分ノモノ五、他ハ皆一時間以上ニ渉リ辻村君ノ報告例ハ實ニ其レコードナリ。胸壁ヲ嘴開セシメタル程度ハ長サ十三―十五厘米、幅七―十二厘米達シ手術ノ種類ハ單ニ試験的ノモノ五、橫隔膜ヲ切リシ胃ヲ胸腔ニ引キ出シテ檢シタルモノ四、整形手術ヲ行ヒシモノ二、「フレニコトミー」(胸腔内)二、腫瘍剔出一、肺組織試験的切除一例ナリ。

其結果平壓ナリシガ爲メニ危險ナル症狀ヲ呈シタルモノ一例モ無ク、左側ニ比シテ危險ナリト言ヒ或ハ肋膜ニ癒着無キ時ハ危險ナリトノ説モアレドモ(上記ノ内十例ハ全ク癒着ノ痕跡ダニ無キモノナリシモ)一回モ危險ナル場合ニ遭遇セザリキ。

開胸ノ瞬間ニ「アブノエ」ヲ呈シテ呼吸運動靜止セシモノハ四例アリシモ再ビ呼吸シ始ムルヲ俟ツ時ハ數秒後ニシテ靜カニ、數分後ハヤ、頻數ニ呼吸シ來ルヲ常トセリ。脈搏モ整然トシテ唯心蓋ニ手術器械殊ニ鈎ヲ懸ケタル時ノミ不整トナリシヲ見タリ。(各例ニツキ開胸時間中ノ呼吸數ヲ列舉シ、剔出セシ標本ヲ供覽セリ)。

二七、癥痕性氣管狹窄ノ一例 (缺席)

大阪 宇佐美 五郎

二八、右氣管枝ニ嵌入セシ異物摘出ノ一例

京都 由 茅 二 五 四

五歳ノ男兒遊戯中ニ小石片ヲ誤嚥セルモ右氣管枝内ニ嵌入セリ。氣管鏡ヲ以テ之ガ摘出術施行ノ爲患兒ヲ垂頭背位ニ置キタルニ咳嗽ト共ニ該異物ハ聲門部ニ移動シ來リ突然窒息症狀ヲ招來セリ。應急の氣管切開術ヲ以テ能ク之ヲ救ヒ得タル後上方直達法ニテ聲門下部ニ嵌在セル異物ヲ認メ且鉗子ヲ以テ把握シ得タルモ異物過大ニシテ聲門ヲ通過セズ。依テ氣管切開口ヨリ之ヲ抽出セリ。(X線寫眞及摘出石片供覽)

氣管鏡ヲ以テ上部氣道ニ嵌在セル異物ヲ摘出スルニ際シテ(一)上方直達法ヲ成功スル場合ト(二)氣管切開ヲ施シテ下方直達法ヲ採用スベキ場合トアリ。ソノ上方直達法可能ナルガ如ク見ユル場合ト雖モ本例ニ見ル如キ困難ノ生ジ得ベキヲ以テ豫メ氣管切開術ニ對スル準備ヲ整ヘ置クノ要アルベシ。

二九、寒性膿瘍ノ切開ハ不可力 (缺席)

大阪 岩 永 仁 雄

三〇、橈骨莖狀突起痛ニ就テ (X線及組織標本供覽)

京都 林 喜 作

橈骨ノ莖狀突起部ノ疼痛ニ就テハ已ニ Quervain ニヨリテ注意セラレ狹窄性腱鞘炎ナル特殊ノ疾患ナリトシテ記載セラレタルモ、其後報告ハ極メテ少ク、稀ナルモノトシテ觀ラレテ居リマス。

我國ニ於テハ此疾患ハ極メテ多數ニ存在スルヲ以テ、私ハ此等ノ報告ヲ讀マザル以前ヨリ注意シマシタ。私ハ茲八年間ニ六十例ヲ得マシタ。外國ニハ比較的稀ニシテ日本ニハ特ニ多數ニ存在スルモノナルヤモ知レマセン。私ハ

一五四 (第壹號 一五四)

先統計ヲ示シマス、六十例ノ中、男性六例、女性五十四例デ、女子ガ大多數ヲ占メテ居マス。外國ノ報告ニハ女子ニ限リテ來ル如ク記サル、モ、稀ニハ男子ニ來ルモノナル事ヲ知ラレマス。年齒ハ十七歳ヨリ六十九歳ニ至リ各十年期ニ區分スルト、四、十七、十三、七、十六、三、デ二十歳代ト五十歳代トニ多イヤウデアリマス。患側ニ就テハ、外國ノ記載ニテハ不明ナルモ、私ノデハ左側十八、右側四十一、兩側一、デアリマス。故ニ右手ニ多ク來ル事ハ爭ハハレヌ事デアリマス。症候ニ就テ綜合シテ申シマス、患者ノ主訴ハ手仕事ニ際シテ腕關節ノ橈骨側ニ疼痛ヲ覺エル事デ遂ニ仕事ニ堪ヘナイト云フノデアリマス。

視診ニテハ皮膚ハ何等ノ變化ナク、炎症性ノ着色ナク、浮腫ナク能ク移動性ヲ有ス。手部ハ疼痛甚シキモノハ腕關節ニテ少シク内轉セル位置ヲトル。外轉運動ヲ嫌惡ス。莖狀突起部ハ全ク腫脹ナキモノモアルモ少シク隆起シ、外見上骨ニ肥厚アルガ如ク見ユルヲ常トシマス。私ハ三例ニテ莖狀突起部ニ米粒大ノ突起ヲ有スルモノヲ見出シマシタ。夫ハ軟骨樣ノ硬度デアリ初メ骨ノ肥厚ナル可シト考ヘラレタルモ、X線ニテ骨ニ異狀ナキヲ認メマシタ、即チ該突起ハ軟部ヨリ成ル事ヲ知りマシタ。

腕關節ノ運動ハ多クハ障害セラレマセン、然シ症狀ノ重キモノニテハ外轉運動ガ全ク妨ゲラレ、強ヒテ運動ヲ試ムレバ非常ニ疼痛ヲ訴ヘマス。觸診ニテ莖狀突起ノ先端ノ末梢部ヲ橈尺方向ニ壓スルト疼痛ヲ訴ヘマス。此際手部ヲ内轉シテ壓スルト輕キモノハ疼痛無キモ外轉シテ壓スルト必ズ疼痛ヲ訴ヘマス。此ハ明力ニ診斷ノ目標トナルモノナル可シト考ヘラレマス。莖狀突起ハ背側及掌側ヨリ壓スルモ疼痛ハアリマセン、此部ニクレビタチオンハ觸レマセン。此特有ナル疼痛ガ莖狀突起部ニ限局セル事ガ他ノ疾患トノ鑑別トナルモノデアリマス。

私ハ多數ノ例ニ於テX線ニテ檢シタルモ、骨ニハ變化ヲ認メラレマセンデシタ、私ハ跟骨ヤ脛骨結節ニ見ル如キ骨ノスポンジニテモ發見セズヤト想ヒ

タルモ徒勞デアリマシタ。

私ハ最近一例ヲ手術シマシタ。夫ハX線ニテ骨ニ變化ナキモ米粒大ノ隆起ヲ莖狀突起部ニ存シタルモノデアリマス。皮膚ヲ切開スルト其隆起ハ粟粒大デ背側腕靱帶ノ上ニ位置シテ居マス。夫ヲ中心トシテ靱帶及腱鞘ノ一部ヲ切除シタルニ、長拇指外轉筋及短拇指伸筋ノ腱ガ露出シマシタ。即チ此部ハ背側腕靱帶ノ第一ノ區劃ニ於テモ部分デアリマス、腱ニハ異狀ナク、腱鞘ノ内面ニモ變化ナク何等滲出液ヲモ認メラレマセン。唯背側腕靱帶ノ此部ニ於ケル肥厚ガ著明デアツテ且著シク此區劃ガ狹窄セラレ二ツノ腱ヲ容ル、ニ不充分ナル事ガ認メラレマス。單ニ皮膚縫合ヲ施シテ手術ヲ終リマシタ。

切除シタルモノヲ縱斷セルニ、突起ハ内部ニコロロイド様ノ物質ヲ含ミ即チ小ナルカンギリオンナルヲ知リマシタ、切片ヲ鏡檢スルト背側腕靱帶ノ内部ニ數箇ノ退行性變性ニ陥レル部分ヲ認メラレ、一部ハコロロイド様物質ト變ジ其周圍ハ増殖セル結締織ニテ包マレ、外部ニ隆起シ一部腱鞘内ニ位置スルモノハ内面トノ交通ハ脆弱ナル薄膜ニテ遮ラレアルヲ認メラレマス。

私ハ此ノ例ニ於テハ約半年間此部ニ疼痛ヲ訴ヘ最近ニ至リ隆起ヲ認メラレタル事ヨリ、狹窄性腱鞘炎ノ古キモノニ斯クカンギリオンヲ發シタルモノナル可シト考ヘマス。尙多クノ例症ヲ比較研究スル事が必要デアリマス。Chen¹ Painノ検査ニテハ單ニ強靱ナル結締織ノ肥厚ヲ認メ他ニ新シキ炎症狀態ヲ認メヌト云フニ過ギマセン。

實際手術ニテ狹窄去レバ疼痛ハ直ニ治シマス。

私ハ尙一例ヲ手術シマシタガ單ニ切開ノミデ目的ヲ達シマシタ。此ニテハ肥厚ヲ認メタルミデアリマス。

原因トシテ外傷過勞等ガ擧ゲラル、ガ、私ノ例ニテモ裁縫ガ最多ク、他ニ三味線、柔道ノ稽古等手ヲ使フ事ガ過度ナル際ニ來ルハ事實デアリマス。

療法。慢性ノ疾患ナルヲ以テ多クハ疼痛ヲ忍ビツ、仕事ニ從事スルヲ以テ永ク治シマセヌ。休息セシメン爲メニハ固定繃帶可ナリ。電氣、マツサージ

等モ可ナルモ長時日ヲ要ス。是レ短時ニ治癒セシメンニハ切開ヲ要ス、而シテ若シ創痕ノ醜惡ヲ嫌ハバ切開刀ニテ背側腕靱帶ノ皮下切開ヲ試ル事最モ可ナリト思ハレマス。

林博士ニ對スル質問

大澤達

唯今ノ御演説ハ非常ニ面白ク拜聴致シマシタガ此疾患ト職業トノ間ニハ何カ御認メニナリマセンデシタカ。私モ從來此ノ疾患ニ興味ヲ持ツテ見テ居リマスガ私ノ見タ諸例ハ Hancher² ヲスルモノニ限ラレテ居ルヨウデアリマス。殊ニ最近ニ注意シタ例ナドハ「カーテン」製作ニ從事スル若イ男デアツタガ色々ノ治療無効ノ後職業ヲ休マシムルニ至ツテ始メテ治癒シタルデアリマシタ。(私ハ此ノ疾患ガ何カ過勞性骨膜炎乃至ハシユラツテル氏病ト云フ様ナモノト似タ様ナモノデハナイカト疑フデアリマス)。

三、化膿性筋炎ノ發生ニ就イテ

(第二回報告)

大阪小澤凱夫

余ハ本年ノ日本外科學會ニ於イテ日本ニ急性化膿性多發性筋炎ノ多キハ其ノ白米食ニヨルモノナルベキヲ實驗のニ證明シ之レヲ報告シタリ。當時余ノ報告シタルハ實ニ白米食ニシテ爾來研鑽スルニ此ノ白米食ハ一歩ヲ進メテ、「グイタミン」B缺乏説ヲ産ムニイタレリ。即チ實驗的化膿性筋炎ノ發生ガ白米食ニヨリテ促サル、モノナルニ、今白米食ニ「グイタミン」B製劑ヲ加フル時ハ其ノ傾向減退シ、又反對ニ「グイタミン」Bヲ缺キ他ノ營養ヲ兼有スル食餌ヲ以テスル時ハ白米食ノ場合ト同様ナル筋炎形成ノ傾向ノ増強スルヲ見ルガ故ナリ。

三二、兔唇手術ノ時期ニ就テ (抄録未着)

大阪 緒方 祐將

三三、腹膜炎「エーテル」療法ニ關スル實驗的考察

(抄録未着)

長崎 原 要

三四、腎臓剔出手術適應症決定ノ一方法 (缺席)

大阪 七田 龍雄

三五、非特異性抗原ノ免疫的凝集素產生ニ

及ボス影響ニ就テ

(非特異性抗原ニ關スル生物學的研究 第五報)

大阪 黒田 倭民

非特異性抗原注射ガ特殊免疫元ニヨル特殊免疫體生成ニ及ボス影響ヲ凝集反應ヲ指標ト爲シテ追究セント欲シ次ギノ實驗ヲ企テタリ。

腸壁扶斯「ワクチン」一・〇㏾ヲ體重約二千瓦内外ノ各群三頭宛ヨリナルA、B、C及ビDノ四群ノ白色雄家兔ノ耳靜脈内ニ注射シ注射後一日ヲ經テ非特異性抗原液「オムナゲン」〇・八㏾ヲA群ニ一・四㏾ヲB群ニ二・〇㏾ヲC群ニ注射シ該抗原液注射後二週間五回ニ亘リテ採血シ一面ニハ腸壁扶斯菌ニ對スル血清中凝集價ノ推移ヲ測定シ他面ニハ血中白血球數ノ増減ヲ觀察セリ。

又別ニ對照トシテD群ニハ腸壁扶斯「ワクチン」一・〇㏾注射後一日ヲ經テ〇・八五%食鹽水一・〇㏾ヲ注射シ上述ノ検査ヲ遂ゲタリ。

以上實驗ニヨリテ特殊免疫元ヲ以テ特殊免疫的凝集素ノ產ヲ促スニ際シ非

特異性抗原ノ適量ヲ併セ注射スルコトニヨリテ單ニ特殊免疫元ノミヲ使用スルヨリモ遙ニ高度ノ凝集素產生ヲ期シ得ルモノナル事ヲ知レリ。

三六、膿球ノ超生體染色ト創傷治癒トノ關係

京都 松本 彰

Typanblau, Kongorot ノ如キ膠樣色素ニテ創傷分泌物ヲ染メルト染色シタ白血球ト不染色ノ白血球トガ出來ル。コレヲ顯微鏡下ニ算數シテソノ百分比ヲトリ染色及不染色白血球ノ百分率ヲ求メル。

Seydewitz u. Lampe ノ說ニ從ツテ健康ノ細胞膜ハ右ノ如キ膠樣液ヲ透過ナイ。從ツテ右ノ検査ノ結果染色白血球ハ病芽ノタメニ障害セラレタモノト不染色ノモノハ健康ナモノト斷定スル。

種々ノ創傷ニ就イテ右ノ検査ヲ行フト開放創デハ創傷ガ治癒ニ向フニ平行シテ不染色白血球ガ高率ヲ示ス。創傷ノ狀態又ハ異物ノ存在等ニヨリ分泌物排泄ガ不良デアツタリ炎症ノ減退ガ拂々シクナイ時ニハ染色白血球ガ高率ヲ示シテ來ル。即チ不染色白血球ノ高率ハ創傷治癒ノ傾向ヲ示シ染色白血球ノ高率ハ治癒傾向ノ遲延ヲ示ス。

コノ觀方ヲ臨床の處見ニ併用スレバ創傷ノ豫後炎症程度ヲ判斷スルニ便利デアラウ。シカシナガラ炎症程度ツヨキ場合ニ分泌物排泄ガ急ニ良クナツタ様ナ場合ニハ一時的ニ不染色白血球ガ高率ヲ示スコトガアル。コレハ游出シタ健康白血球ガ障害セラル、遑ナク外ニ出ル結果ト考ヘラレル。

三七、急性化膿性骨髓炎ノ發生ニ就テ

(抄録未着)

大阪 桑波田 秀枝

三八、特發性總輸膽管囊腫治驗

大阪 加藤亮之輔
五十嵐修三

特發性輸膽管囊腫又ハ擴張ニ關スル報告ハ約八十五例ヲ算シ、内約十五例ハ本邦ニ於ケルモノナリ、本症ハ黃疸、疝痛、腫瘍ヲ以テ主徴候トナスガ故ニ適確ナル診斷ヲ得ル事困難ナル場合多ク、且ツ豫後ハ一般不良ナレドモ余等ノ實驗セシ例ハ稀有ナル巨大ナ囊腫ニシテ而モ術後ノ經過極メテ良好ナリ

雜 錄

京大外科雜誌抄讀會

十一月二十八日(月)午後六時半。

於樂友會館

演 題

- 一、胃切除ニ於ケル無菌的操作 河田君
 - 二、胃潰瘍ニ對スル膽囊胃吻合術 神部君
 - 三、盲腸及上行結腸ノ捻捩(三例報告) 林君
 - 四、人工膀胱造設 阪田君
 - 五、交感神經ト腫瘍發育トノ關係 横田(宗)君
 - 六、脚部閉塞性動脈内膜炎ノ一療法 青柳君
- 綜説、痔疾ノ本體ト治療法 大澤助教授

キ。

患者ハ二十五歳ノ男子ニシテ昭和二年四月十日頃ヨリ右側上腹部ニ疼痛發作ヲ生ジ食慾不振、睡眠障碍等ヲ訴ヘ六月十二日頃ヨリ腹部ノ膨滿、黃疸ヲ認ムルニ至リ七月七日腹腔腫瘍ニ膽石症ナル診斷ノ下ニ開腹術ヲ行ヒタルニ黃褐色膿樣惡臭性内溶液約四〇〇〇蚝ヲ入ル、人頭大以上ノ總輸膽管囊腫ナル事ヲ確メタリ。

此ノ際行ヒタル術式ハ輸膽管十二指腸吻合術及ビ囊腫壁ノ可及的切除ナリシガ經過良好ニシテ術後二十四日目ニ治癒退院セリ。

十二月廿二日(木)午後六時。

於樂友會館

演 題

- 一、腎臟摘出手術後ニ於ケル股動脈栓塞ニ就テ 黃田君
 - 二、重複腎ニ於ケル腎臟水腫半部剔出例 下田君
 - 三、術後ノ尿閉ニビロカルビン靜脈内注射 田淵君
 - 四、一側性糖尿ニ就テ 荒木君
 - 五、慢性膿胸 由茅君
 - 六、膝痛ニ就テ 近藤君
 - 七、胃腸吻合術後ニ於ケル出血ニ就テ 巽君
- 綜説、レントゲン線ニ就テ 塚原講師